

「帝国大学令」と「同志社大学設立の旨意」への道のり

奨励	谷本 啓〔たにもと・あきら〕
奨励者紹介	同志社大学商学部准教授 〔研究テーマ〕サービス産業における人材活用の制度と構造

主よ、あなたの御言葉のとおり
あなたの僕に恵み深くお計らいください。
確かな判断力と知識をもつように
わたしを教えてください。
わたしはあなたの戒めを信じています。
わたしは迷い出て、ついに卑しめられました。
今からは、あなたの仰せを守らせてください。
あなたは善なる方、すべてを善とする方。
あなたの掟を教えてください。
傲慢な者は偽りの葉を塗ろうとしますが
わたしは心を尽くしてあなたの命令を守ります。
彼らの心は脂肪に閉ざされています。
わたしはあなたの律法を楽しみとします。
卑しめられたのはわたしのために良いことでした。
わたしはあなたの掟を学ぶようになりました。
あなたの口から出る律法はわたしにとって
幾千の金銀にまさる恵みです。

（詩編 119編65—72節）

はじめに

本日は創立記念礼拝ということで、「『帝国大学令』と『同志社大学設立の旨意』への道のり」と題してお話をさせていただきます。そもそも、商学部というビジネスを研究する学部の人間が日本の高等教育史のような話をするのも変な話なのですが、きっかけは「商学」という全学共通教養教育科目を担当したことでした。教養教育科目を担当するにあたり、そもそも「教養」とは何かということを疑問に思い、さらにそれを教える「大学」、英語で表記すれば「university」ですが、なぜ「university」が「大学」と日本語に訳されるようになったのか疑問に思ったことが、今日お話しする内容へとつながることになりました。

「大学」という言葉の由来

そもそも、「大学」という言葉がどこからきたかという点、古代中国の学校制度に由来します。皆さんは儒教のテキストとして四書五経という書物があるのを聞いたことがあるかもしれません。その四書五経の「四書」とは『論語』『孟子』『中庸』『大学』の4冊（4巻）なのですが、そのなかの『大学』のタイトルともなっている学校制度とは、古代中国では上は王族から下は平民の子弟に至るまでまず「小学」で学び、その後、15歳になると王族や貴族、平民の優秀な者はさらに「大学」で学ぶことになっていたそうです。

ご存知のとおり、歴史的に古くから日本は中国の文物・制度を多く取り入れていますが、日本における高等教育機関の発祥は、平安時代の朝廷の官僚養成機関である「大学寮」に端を発しています。そこでは歴史、文章・書道、法律、算術などを教育し、朝廷の役人となる人材を育成していました。この大学寮は現在でいうと二条城の南西、中京中学校の南側にありました（写真1、写真2）。しかしこの大学寮は、後に藤原氏などの有力貴族が朝廷の役職を独占・世襲するようになったこと、有力貴族は自分たちの子弟のみを教育する勸学院などの独自の教育機関を設けたこと、朝廷の財政の悪化や火災をはじめとする災害で荒廃、衰退したことから、やがて平安時代末には事実上閉鎖されてしまいます。

中世の高等教育機関

大学寮が衰退した後、16世紀中頃に日本を訪れたフランシスコ・ザビエルによる日本の高等教育の状況について書かれた書簡（1549年）が残されています。それによると、「ミヤコの大学のほかに他の五つの主要な大学があって、それらは高野、根来、比叡山、近江と名づけられる四つの大学はミヤコの周囲にあり、それぞれの大学は三五〇人以上の学生を擁しているといわれています。ミヤコから遠く離れた坂東（関東）と呼ばれる地方には、日本でもっとも大きく、もっとも有名な別の大学（下野の国の足利学校）があって、他の大学よりも大勢の学生が行きます」と記載されているそうです。

鎌倉から室町時代、そして戦国時代にかけて、ここに記載されているミヤコの大学である大学寮は平安時代末期に衰退、閉鎖され、大学寮で教鞭をとっていた学者の家系がひらく私塾が代替していました。また、ミヤコ周辺の大学とは、檀林（だんりん）と呼ばれる仏教寺院に附属する僧侶の教育・養成機関のことです。別名を学問所、学林、禅林などと呼ばれることもあります。ご存知のとおり、仏教は生老病死に対する考え方をはじめ、ある種の高度な哲学大系とも言えるもので、僧侶はこの当時の知識階層を形成していました。

そして、坂東（関東）にある最大の大学とは、鎌倉時代に創建された足利学校（現・栃木県足利市）のことです（写真3、写真4）。ここでは初期には儒学、後にはさらに兵学、医学、易学などを教育していました。特に戦国時代ともなると、兵学や医学は合戦をするために必要な実学として重要になりますが、合戦に勝つためには兵士の士気が重要になります。そのため易学で吉日を選んで出陣するなど、いわゆる「縁起をかつぐ」ためにも易学が必要とされたようです。

近世以降の高等教育機関

さて、戦国時代が終わり、安土・桃山時代を経て江戸幕府が成立すると、幕府としても政治を司る上で運営のための人材が必要となります。その際、江戸幕府直轄の教育機関として17世紀中頃に成立したのが昌平坂学問所（昌平塾、現：東京都神田湯島）です。ちなみに「昌平」とは孔子の生誕地である中国山東省曲阜県の郷の名に由来しています。

この昌平坂学問所では、武士階級に対する儒学、後に朱子学の教育が行われました。さらに江戸時代末期、幕末ともなると、儒学以外の国学や洋学、医学などにもその教育領域が拡大され、和学講談所（国学）、蕃書調所（洋学）、医学所、講武所などが開設されました。現在、この昌平坂学問所の跡地は湯島聖堂と東京医科歯科大学になっており、JRお茶の水駅のホームや駅の横にある聖橋（ひじりばし）からも見るができます（写真5、写真6）。

その後、明治維新により幕府の教育機関である昌平坂学問所は閉鎖されますが、明治政府としても政府を運営する官僚が必要です。そのため閉鎖されていた昌平坂学問所、医学所、開成所（蕃書調所）が1868（明治元）年に再開されますが、翌1869（明治2）年6月に昌平坂学問所（昌平学校）は大学校に、医学所（医学校）と開成所（開成学校）が大学分局と名前を改められます。つまり明治維新後の「王政復古」により、かつての朝廷の教育機関名がここに復活することとなったのです。

その半年後、明治2年12月には昌平学校は大学（大学本校）に、開成学校は大学南校に、医学校は大学東校に名称が変わりますが、この時期、大学本校では教育の主導権をめぐり皇学（国学）派と漢学（儒学）派の主導権争いによる対立・抗争が激化します。それに端を発して教育のありようについての混乱が生じ、1870（明治3）年7月には大学本校が閉鎖されることとなり、教育内容は洋学一般と医学などの実学が中心となっていきます。

西欧型大学の登場

そして、1877（明治10）年4月には、開成学校（洋学一般）と医学校を母体に、法学部、理学部、医学部、それに新設された文学部をもつ東京大学が設立されます。その後、1886（明治19）年4月には、「帝国大学令」が公布され、東京大学は他の政府官立学校とあわせて「帝国大学」（後の東京帝国大学）に組織改編されます。当時の富国強兵を国策とする明治政府にとって、欧米の優れた科学技術の導入とそれを用いる人材の育成が急務でした。そのため欧米からいわゆるお雇い外国人として知られる数多くの研究者、教育者を招聘し、あわせて教育方法、教材なども輸入しました。まさに欧米の高等教育機関である「university」をそのまま移植しようとしたのであり、その訳語として平安時代の大学寮に由来する「大学」という言葉が充てられたのです。

また「帝国大学令」（明治19年勅令第3号）には、「第一条 帝国大学ハ国家ノ須要ニ応スル學術技芸ヲ教授シ及其實奥ヲ攷究スルヲ以テ目的トス」と規定されています。つまり、当時の富国強兵を国策とする明治政府にとって、帝国大学とは国家にとって役立つ人材を育成する高等教育機関であることが明記されています。ここに学術技芸だけでなくそれを用いる品行ある人物を育成する必要を論じる「同志社大学設立の旨意」（明治21年11月）との大きな違いを見ることができます。「同志社大学設立の旨意」からは、単に国家の役に立つというだけでなく、その専門知識や技能を何のために役に立てるのかという視点や価値観の違い、官立大学と私立大学の設立における理念の違いを見ることができると思います。

ただ、歴史的に見ると、たとえそれが封建制度を助長するものであっても、大学寮、檀林、足利学校、昌平坂学問所では儒学や仏教に基づく一定の倫理観、道徳観をもった人物を育成しようと努めていました。しかし明治維新後の「大学」では、維新後の混乱と富国強兵という目的のために「学んだことを何のために用いるか」という部分の倫理観、価値観といった、いわゆる徳育といったものが抜け落ちることになったように思います。それに対して、私学としての同志社大学がその設立の旨意で謳っていることは、帝国大学令には欠けていたもの、儒教に代わるキリスト教主義による徳育、人材としてだけでなく「人物」を育成する必要を述べています。現在、各大学にディプロマ・ポリシーなど人材育成目的の明確化が求められていますが、本学の創立記念日を迎えるにあたり、ここに改めて「同志社大学設立の旨意」の先見性、重要性を同志社人として再認識できるのではないかと思う次第です。

謝辞：「帝国大学令」と「同志社大学設立の旨意」の比較については、本学商学部で初年次教育を担当されていた本田康二郎先生（現在、金沢医科大学准教授）よりアイデアと資料の提供をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

【主要参考資料】

- ・川瀬一馬『増補新訂 足利学校の研究〈新装版〉』吉川弘文館 2015年
- ・前澤輝政『足利学校—その起源と変遷—』毎日新聞社 2003年
- ・大久保利謙『日本の大学』玉川大学出版部 1997年
- ・立花 隆『東大生はバカになったか—知的亡国論+現代教養論—』文藝春秋 2004年
- ・河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』3 平凡社 1994年
- ・宇野哲人（全訳注）『大学』講談社 1983年
- ・苅部 直「翻訳語事情（university）」『読売新聞』（2014年9月8日朝刊）
- ・玉川大学教育博物館・館蔵書資料の紹介「下野国足利学校絵図面」解説（<http://www.tamagawa.ac.jp/museum/archive/1996/064.html>）2017年1月10日閲覧

2016年11月16日 今出川水曜チャペル・アワー「創立記念礼拝奨励」記録

※図の表示はホームページでは省略します。